用此方則於生々之術庶幾有得軒岐不傳之秘者耶、

于時嘉永二年歲次己酉春二月中浣　　平戸新田醫員　齋藤貴泰玄識

〔閑窻瑣談三〕名醫德本の奇事

世に名高き甲斐の德本は、和漢古今に珍らしき恬澹の人なり、〇略中大永享祿年間は、甲斐の州に遊び、醫道を以て、武田信虎の家に爲客、抑德本翁の醫術は、卽功を專とし、其療治いさゝか烈しきに似たり、然ば病に依て、峻劑、毒藥、機宜不誤、攻擊瞑眩、不避世誼、〇略註是を以て、富貴なる輩は、俗諺の如く、古方家と忌怖れて信せず、却て山野樸質の民に尊信せられ、殊に貧しきを憐みて、療養を信切にし、居所の惡きを厭はず、天文年中には、甲州を去て、信濃國諏訪郡東堀村に住し、天正の亂に、武田氏亡て後、再甲州に還り、自ら草廬を構、號て茅菴といふ、

〔皇國名醫傳前編下〕板坂氏

板坂宗頓、近江坂本人、以醫爲業、子宗德稱三位、號大歇、又號湖隱軒、爲人豪縱、而視疾入神、寛正三年、大內敎弘、在伊豫疾、將軍憂之、廣撰良醫、宗德當選而往、時人榮之、子維順徙于京師、擢御醫、叙法印、子備後入道、子宗高通稱卜齋、幼入東福寺、爲僧、武田晴信知而惜之、勸而還俗、承繼家業、宗高後遂仕武田氏、永祿戊辰秋、晴信有病、宗高診曰、徵恙似不足患、然數年後必發、發則不可爲、請早計之、晴信不可、果如其言、板坂宗慶、著家珍方、板坂釣閑、著家傳小兒方、疑皆同族、

〔本朝醫考中〕和氣氏〇略中

利長　明重之子也、叙從五位下、任刑部少輔、剃髮號道三、實明重之門生也、然以精醫業、廢己子、以爲嫡子、和家之醫術再盛行、永正四年正月五日以病卒、〇略中

吉田〇略中

宗恂　宗恂者宗桂之二男也、號意安、又稱又玄子、繼父業、叙法眼位、醫名彰聞、且慕經學、與藤歛夫友